

Title	E・コールネル 農村の毛織業、都市の毛織業
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.6 (1955. 6) ,p.480(58)- 483(61)
JaLC DOI	10.14991/001.19550601-0058
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550601-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

五〇年と對比して一四九億ルーブル増加し、一九四〇年の三倍以上である。また計畫化は完全な集中化であるよりも獨立採算によつた方がより能率的である。

以上のような經濟政策に於て、大切なことは經驗を重ねて完成に近づくといふことである。黨・政府は大衆を教化するだけでなく大衆に學び、經驗を一般化することが必要である。同志フルンチョフの野菜生産の増加に對する案は全社會の向上に大きな役割を演じた。このように地方的經驗を一般化するために提議することが政策の完成を導びくのである。

經濟政策の重要な課題は全社會の増大する物質的文化的要求の最大限の充足を保證することである。このためにレーニンが基本的と考へた手段——「廣い國民大衆との交流、經濟性、創造的イニシアチブの援助、官僚主義との闘争——を斷乎實行しなければならぬ。ただこの手段の遵守によつてのみ黨に提出された大きな課題を解決できるのである。

以上、それ程目新しい論はないが、經濟政策を特に政治經濟學と區別して新しい領域を具體的につかもつた點に興味深いものがある。しかしなお、經濟と政治との相互作用についての深い分析が必要であると考へられる。(加藤 寛)

E・コルネル

『農村の毛織業、都市の毛織業』

Coornaert, E. "Draperies rurales, draperies urbaines. L'évolution de l'industrie flamande au moyen âge et au xvi^e siècle." Revue belge de philologie et d'histoire, 1950. No. 1, pp. 59—96.

早くも十世紀末にフランドルの各地では毛織業が大規模な展開を示していた。そして十三世紀に入り都市工業の制覇が確定的となつた。都市の毛織業は、「高級品製造工業として、イギリス産の上質毛を加工し、規則づくめであつた」。しかし、「全く時代後れた織物を飽くまでも固守しようとする過度の組合規制のために急速に衰退し」て行つた。他方「農村の毛織業は十四世紀に伸長し、十六世紀に絶頂に達した。スペイン産の羊毛を使用して品質の劣つた毛織物を製造し、その發展を完全な自由を負つた。農村の織物業は自由な資本主義への途を進み、その結果社會不安は増し、聖像破壊が續き、...カルヴィン派の反抗が起つた」。

フランドル毛織業の發展について巨匠ピレンヌは以上のような概観を試みた。そしてこの所説が永く重きをなして來た。しかし最近個別研究が進み、その成果を基礎として或る程度の反論が提起されている。にも拘わらず、技術・産業構造・生産者の經濟状態・その社會的地位については少しも觸れるところがない。従つて「解決すべき問題が依然として多い」のである。

しかし以下において紹介される論文でコルネル教授は、手の着けられない一面に光を當てようとしたのではない。むしろフランドル毛織業の發展について今では既に古典的と呼ばれるピレンヌ説に再検討を加えようといふのである。そうすることによつて教授は、この論文で、十世紀末から十六世紀へかけてのフランドル毛織業の展開を、より本質的に把握しようとする。ピレンヌ説と違い、農村毛織業の主導性を如何なる時期についても強調した點、特に注目しなければならぬ。

二

十世紀末以來フランドルは毛織物を各地へ輸出していた。例へばノーヴゴロドの場合、十二世紀初頭に、フランドル織物は重要な輸入品であつた。その頃バルチック沿岸の諸地方に對する進出も目覺しかつた。更に十三世紀に入つて、フランドル毛織業は、イタリー、ドイツ全土、フランス、イベリヤ半島をも市場獨占することが出來た。コルネル教授は、フランドル織物について、「イタリーにおける優位は争われぬし、また他の諸國についても優位は疑いない」といふ。

この時期の初期に關する限り、主要な織物中心は都市であつた。フランス、イーブル、ガン、ドウェー、リール、セントメー、ブルージュの繁榮は毛織業に負つた。コルネル教授によれば、「毛織業は都市で專業化され、改良されて完全なるものとなり、特異性と高い評判を維持することが出來た」。イギリス産の上質毛で高級品を生産し、諸外國へ輸出していたのは正しくこの都市工業であつたのである。コルネル教授は、都市毛織業の繁榮期を十一・二世紀に求め、この點、十三世紀を主張するピレンヌ説と相容れない。

むしろ十三世紀は、コルネル教授にとつて、農村毛織物業の抬頭期であつた。特に「フランドルの毛織物が遠隔諸國で大評判となつて以來」、「ドイツ、スミューダ、ポーリアリナガ、ヘイスティンが農村中心として顯著な發展を示した。その他オーストベルフ、ヒステルが農村中心として著名であり、オランダ、ベルフ、トゥールトの商人を通じ、大量に輸出していた。フェー、ルネ、ベルヒア、バイエル等の進出も無視し難い。これら農村の諸中心では、主として薄手の毛織物が生産され、農村工業の發展は正に、海外におけるこの種の織物に對する需要の増加に

呼應するものであつた。「品質の劣つた毛織物がフランドル織物業のために最初の成功を齎らした」のであり、「ドイツ、スミューダやポーリアリナガのような農村の諸中心がフランドル毛織業の最初の發展に與つて力あつた」とコルネル教授はいふ。同時に教授は、そのために必要な原料として、品質の劣つたスコットランド産やアイルランド産の羊毛が、イギリス産の上質毛と並んで早くから、しかも同じだけ大量に輸入されている事實を指摘している。

十三世紀に入り、農村毛織業の抬頭は、このように顯著であつた。その原因は、既に指摘した如く、市場構造の變化にあつたのである。都市の毛織業も、この變化に應じて生産組織を變革して行かない限り、所詮没落の運命にあつた。しかし都市の毛織業は、ピレンヌ説で指摘された如く、「全く時代後れた織物を飽くまでも固守しようとする過度の組合規制のために」衰退を免かれなかつたのであろうか。この點についてコルネル教授は、都市的中心でも新種の織物を導入しようとする傾向が顯著となり、早くも、例へばブルージュ、イーブルでは、農村で生産されるより廉く薄手の毛織物を輸出することが出來た程であつたといふ。フランドル織物業の場合、コルネル教授によれば、「規制の必要を自ら體は新しく」、十三世紀の後期に現われたに過ぎないのであり、概して「状態は...自由であつた」のである。ピレンヌ説にいう「規則づくめ」ではなかつた。

三

十三世紀末にフランドル織物業は重大な危機に見舞われた。危機は遠く十四世紀末まで續いた。危機の外的原因としては、ブラバン産織物の大規模な進出が擧げられよう。また内的原因としては、フランドルにおける政情不安が織物業の伸張を阻止

書評及び紹介

する重大な要因となつたのであつた。コールネル教授によれば「その衰退は、確かに、由々しい出来事であつた」のである。しかしフランスの毛織業は、この危機の時代に、一様に衰退して行つたわけではない。危機による影響が集中的に現われたといわれる都市の場合についても、衰退がフランスの如何なる都市にも同時に起つたのではなかつた。また危機の持続する期間も都市により大いに相違した。例えばイーブルの場合、十三世紀末に依然として繁榮を續けていたが、十四世紀に入つて非常に衰退した。そしてイーブルが復活することが出来たのは、十五世紀に入つてからであつた。またアライスの場合、十四世紀初頭にはむしろ繁榮期であり、十四世紀中葉に若干の衰退を示しているに過ぎない。そして早くも十四世紀末には薄手の毛織物をドイツへ向け大量に輸出することが出来る程に回復していた。ヴァランシアンヌ、トゥールネン、ドゥエーについても、危機の時期・その持続の期間を一律なものとして断定することは出来ない。しかしコールネル教授の指摘によるまでもなく概して「十四世紀における大都市の活躍が十三世紀より劣つていたことは疑いない」のである。

しかし衰退期といわれたこの時期においても、農村の諸中心では、依然として毛織業が繁榮を續けていたのであつた。ポリアリソグやデイクスミューダの繁榮はいうまでもない。またランガマルクやホンドシュエトが「輝かしい経歴」を開始したのは、正にこの時期であつたのである。農村の諸中心における繁榮に對し都市の諸中心は悪感情を持つた。ガンは十三世紀末にその反感を露骨に示し、またブルージュ、イーブル、セントメーブルが附近の農村に對して抱いていた反感には、全く根強いものがあつたのである。このような動きが、農村の新種の織物を採用しようとした同じ都市の内部に、對抗的に顯著になつ

たことは、コールネル教授によれば、農村における毛織物業の意外な進展を示す證據にほかならない。「農村の各所で幸いにして毛織業が起つた」。農村の諸中心のうち、例えばランガマルクの場合、一三八五年に絶頂に達し、引續き高い生産水準を維持していた。ウエルウィックは、農村の毛織中心として、一四〇〇年まで重要性を續けていることが出来た。コルトレイクは一四二二年まで繁榮を續けている。またホンドシュエトは「十四世紀の初頭以來イタリで成功し、十四世紀末まで上昇を續けた」。従つて、「一般に概して不況と見られた時期においても、若干の織物中心は繁榮を續け、國際市場で、成功は顯著であつた」のである。實にこれは、コールネル教授によれば、農村の諸中心に負つたのであり、十四世紀を危機の時代といわなければならないとしたら、都市の毛織業に關する限りであつたのである。

四

十六世紀に入り、大都市の傳統的な毛織物業は衰退した。これに代つて、農村における毛織業の發展は目覺しく、都市の傳統的な毛織業に對する絶對的な優位を容易に達成することが出来た。十六世紀農村における毛織物業の發展は、コールネル教授によれば、「疑いのない事實であつた」のである。

特にアルマンティエール、ヌーヴ・エグリス、ホンドシュエトの發展が目覺しかつた。アルマンティエールは一五四〇年に發展の頂點に達し、ヌーヴ・エグリスは一五四八年に最盛期を迎えることが出来た。しかしこの兩中心とも以後急速に衰退し例えは一五七一年にアルマンティエールでは、織物業者三百人を数えたに過ぎず、従つて最盛期の約半數であつた。これに對してホンドシュエトは一五六八年まで發展を續け、そしてこの

年には薄手の毛織物三千反を生産することが出来た。しかしこの繁榮も、政情の不安によつて間もなく阻止されなければならなかつた。同じく繁榮期を迎えることが出来たといつても、コールネル教授の指摘によるまでもなく、「農村の毛織物業は非常に異なつた様相を呈している」のであつた。

農村における毛織業の繁榮を見て、都市の毛織工業は極力これを見習おうとした。そしてこの傾向が以前より増してこの時期に顯著になつたとコールネル教授はいうのである。教授は若干の都市について、新技術移植の苦心を述べている。例えはブルージュの場合、その努力は報いられ、遠く十八世紀まで薄手の毛織物をアメリカへ向け輸出することが出来た。イーブルも薄手の毛織物の生産を維持していた。ワレーンの諸都市は技術改良に成功することが出来た。またアライスは十六世紀にホンドシュエト産以上のものを生産することが出来た。そして間もなく、フランス地方から輸出される織物の主要な部分を産出するようになったのである。トゥールネンやヴァランシアンヌ産の織物が、十六世紀フランスの輸出貿易において果していた役割も無視し難い。リールに關しては、十五世紀を経て、十六世紀にはフランス第一の織物中心となることが出来た。とにかく、農村織業の影響で、都市の織物業は急速な繁榮に向つたのである。そして、コールネル教授によれば、「十六世紀の輸出毛織業は農村工業より都市工業である」と斷言しても差支えない程の繁榮であつた。しかし、都市における毛織業の發展が、農村毛織業の繁榮に刺戟されて起つたという限り、十六世紀についても農村毛織工業の主導性が強調されなければなら

以上がコールネル教授の論文の概要である。知られる如く、教授は、フランスの毛織工業の年代記的考察をもつて終始している。中世における大規模經營の典型と目され、從來取上げられることの多かつたフランスの毛織物業の研究にあつた。コールネル教授が今更の如くかかる態度をもつて臨んだことは、巨匠ビレンヌ以来の基本線に對し根柢から反論を試みようとしたともいふべきで、かなり積極的な意圖を持つものとしなければならぬ。またフランスの經濟發展について常に農村毛織業の主導性を強調し、都市工業の發展も所詮農村における繁榮に刺戟されて惹き起されたとした點、特に興味深いものがある。(渡邊國廣)

高村象平著『西洋經濟史』

西洋經濟史の手頃な著書の必要については年來要望されて來た處であるが、今此處に著者の長年の成果に接し得たことは日本における西洋經濟史學界の喜びである。ともすれば無味乾燥になりがちな斯學に色彩を與え、變轉する歴史を生きたものとして捕捉することのむづかしさは本書において美事に超克され、且つ學習者の研究關心を知らず知らずによび起す配慮が全編に温かくにじみ出ており、著者の物靜かな風格を彷彿たらしめるものがある。然し乍ら峻烈な芯の強さが一貫して流れていることもまた序文のなかでまづ觀取される。

著者は西歐文化の起源を古典古代に求め、第一章「ギリシアローマ」から筆を起す。古典古代の難解な歴史事象がここでは何んのだよみもなく流麗な章句によつて綴られてゆくが、しかし、ここで著者のベースを自分のものとして學びとるためには讀者は可成りの習練を必要としよう。その際ヘレニズムの文明を如何に位置付けるかは評者にとつての關心事であつたが、こ

五